

# 小中一貫校 南アルプス市立白根飯野小学校令和5年度前期学校関係者評価書

## 【学校関係者評価委員会】

- 1 実施日 令和5年9月8日
- 2 会場 白根飯野小学校図書室
- 3 参加者

### (1) 学校関係者評価委員

NO	氏名	役職
1	市川 和郎	元校長・学校評議員
2	飯野 久	学校評議員・南アルプス市議会議員
3	飯田 哲夫	元校長・学校評議員
4	森本 優作	学校評議員・PTA 会長
5	功刀 正文	飯野地区自治会長
6	浅利 武仁	飯丘地区自治会長

### (2) 学校職員 (3名)

NO	氏名	役職	備考
1	河住 悦久	校長	本校在籍2年目
2	瀧澤 智子	教頭	本校在籍1年目/事務局
3	中島 則雄	教務主任	本校在籍1年目

## 4 学校から提案した内容

- (1) 教職員による前期自己評価アンケートの状況
- (2) 学校生活に関する前期児童アンケートの状況
- (3) 学校生活に関する保護者アンケートの状況
- (4) 白根飯野小学校前期自己評価書 (アンケートの分析及び改善方策について)

## 5 学校関係者評価委員会報告概要

本校の学校評価は、学校教育目標の実現 (学校経営方針の実現に向けた本年度の努力点) のための取組状況を、教職員による自己評価に加え、保護者と児童によるアンケート調査結果を活用する中で、それぞれの立場を踏まえるとともに、これらに関わる設問に寄せられた意見や、日常的に行っている児童観察も加味して分析し考えている。

なお、今回の調査は1学期の取組が根拠となる。(文部科学省の通達により、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行すること(5月8日)となった。それに伴いPTA活動や授業参観や学校コロナ禍以前の活動が再開するようになった。そのため、昨年度削除していた、

保護者アンケートの『9 学校は、授業参観・行事等学校開放に努め、保護者と連携し、その意見に耳を傾けている。』『14 P T A活動に進んで参加している』『15 お子さんを地域の行事に参加させている』の項目についても質問事項に追加した。

## [1] 評価基準

全体傾向を把握するため、A B評価を肯定的評価とし、それらの合計が、80%を超えている場合は『満足できる状況』と判断した。また、C D評価を否定的評価とし、それらの合計が20%を超えている場合は『改善の余地がある状況』と判断した。

(A: そう思う B: だいたい思う C: あまり思わない D: そう思わない E: わからない)

## [2] 各項目の分析

### (1) 確かな学力について

本校では校内研究のテーマ「対話し、学び、わかちあう子どもの育成～指導と評価の一体化を通して～」を軸に、児童間の関わりを基盤とし、学習プロセスや言語活動を重視した授業展開によって、主体的・対話的で深い学びの実現を図り、学習指導要領で示される資質・能力の育成に取り組んでいる。

教職員自己評価の結果を見ると「児童が友達の考えや感想に耳を傾け、多様な考えを大切にしながら対話的な深い学習を創造することができたか」、また「ペア学習、グループ学習を有効的に取り入れ、伝え、聞くなど言語活動を充実させることができたか」の2項目については他の項目と比較し、低い平均値となった。新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、児童間で対話する場面を意図的に行うことが今後の課題である。学習課題の提示や振り返りといった学習プロセスを確認したり、言語活動の工夫に取り組んだりしていく必要がある。

今後も一人一人の教育的ニーズや学習状況に応じた個別学習や、ICT活用により、それぞれの考えや意見に即時に触れられる共同学習を実現できるよう、さらに取組を進めていく。

### (2) 豊かな心について

教職員が成果を高く評価したものは「②基本的人権と個人の尊厳を尊重し、いじめや不登校への対応や防止に取り組むことができたか。」「③相手の立場に立って考える体験を重ね、自分がされて嫌なことを、言ったりしったりしない子どもを育てることができたか。」「⑤読書の苦手な子どもにも本を読む時間を確保するなど、すべての子に読書習慣を育むことができたか。」「⑥豊かな読書・文化芸術体験・特別な教科「道徳」の学習等を通し、辛いとき苦しいときにも強く生きる心を育むことができたか。」の4項目である。職員が1学期に特に努力し取り組んだことがわかる。

高い肯定率だが、「居場所づくり」や「縦割り活動」「好感を与える所作や言動、挨拶」では数名の教職員が「ややそう思わない」を選んでいる。

「好感を与える所作や言動、挨拶」については、友達や周りの人を不快にさせる言動が一部の児童に目立ったことや、挨拶をしても挨拶が返ってこないこと等が理由と考えられる。(※挨拶について、学校内では挨拶ができるようになってきていると感じる職員が多い一方、登下校時のあいさつができていない子が多く気になるという保護者の意見もある。) 全校集会や

児童会であいさつの大切さを伝える機会を設けた。今後、小笠原流礼法の授業による人を大切にするための所作を学ぶ機会の充実と、家庭との連携による挨拶や言動の改善が必要である。特に、2 学期は道徳の公開授業を計画し、道徳授業の中でも周りの人を大切にする心を育むような授業展開や、講演会による保護者、教職員を対象とした教育講演会を実施する予定である。

「居場所づくり」については、一部の児童が教室で落ち着いて学習できない様子がみられることが挙げられる。要因としては限定できないが、本人の気持ちに寄り添い、自己肯定感を伸ばす声掛けや個別の支援を引き続き行っていくことや、保護者との連携はもちろん、外部人材による支援を組織的に行っていく必要がある。

また、「縦割り活動」の取り組みについては、この4年間のコロナ禍による異学年間の交流が制限されていたことに加え、5月上旬までコロナ感染症の規制もあり、活動計画が遅れたことが要因と考えられる。しかし、中休みに学年の枠を超えて低学年と高学年が遊ぶ姿が見られるようになってきている。2学期に行われる様々な行事への取組等を通して、他学年との交流を意図的に行い、自己有用感や自己肯定感を高めていけるような機会を設けることが必要である。

保護者の評価においても「②子どもは、仲間と協力し、行事や活動に粘り強く取り組んでいる。」(98%)、「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(95%)「⑤子どもは、学校・学年・学級で理解され、心の居場所を持っている。」(92%)、「⑥子どもは、人の心を思いやり、豊かな心を育てている。」(96%)といずれも高い評価を得た。この結果からもいじめ防止へのきめ細かな対応により子どもたちが自分の存在価値を自覚し、学校生活を送っていることに対して評価されていることが伺える。

### (3) 健やかな体について

教職員自己評価において、「1 運動の苦手な子どもも自己の進歩や達成感を味わわせ、運動習慣を育むことができたか。」「2 日常的な運動・食事・睡眠と健康について理解を深め、健康な生活習慣を育むことができたか。」の両項目とも100%の肯定的な評価となった。また保護者の評価においても、「10 子どもは安全を意識して登下校している。」(92%)、「12 御家庭では、早寝・早起き・朝ごはんに取り組んでいる。」(95%)の項目についても肯定的な評価が高い結果となっている。

今後も日常的な運動や食事、睡眠への理解や取組、また休み時間等の外遊びの励行、登下校中の児童の安全意識を高める指導など、今後も家庭や地域と連携を図りながら、取組を継続していくことが大切である。

### (4) グローバルに活躍する人材について

教職員自己評価2項目「②外国語(外国語活動)を通じて、児童が明るく表情豊かに表現し、理解しあえる喜びを体験し、異文化と共生する態度を養うことができたか。」(89%)「③教科等を有機的に連携させ、自ら学び、学び合い、協働して解決する教育課程の工夫に努めることができたか。」(92%)とも肯定的な評価が高い結果である。しかし「①児童が、学ぶことを通して、自己や他者の良さ、人として生きる良さに気づき、進んで社会と関わる意欲や

態度を育むことができたか。」の1項目は77%と低い評価となっている。この要因も、コロナ禍による関りが少なかったことが挙げられる。外国語の知識や理解のみならず、学ぶことを通して自己や他者の良さに気づき、社会とかかわる意欲や態度の育成を図ることが大切である。また児童のキャリア発達を促すためのキャリアパスポートの活用を通じた取り組みを行い、体験的な活動を増やし、自己肯定感や自己有用感を向上させる取組を継続して行っていきたい。

#### (5) 特別支援教育の推進について

自己評価においては、どの項目とも肯定評価が高い結果となっている。特別支援教育コーディネーターを中心とし、校内支援委員会やケース会議を開催し、情報共有と指導・支援内容の相談・確認を行っている。個々のニーズに応じた指導や支援ができるよう、積極的に関係機関とも連携を図りながら対応してきた結果であると考えられる。特別支援学級だけでなく、通常学級においても課題を抱え、それぞれの特性に応じた支援が必要となる児童が増えてきている状況ではある。職員の支援体制にも限界はあるが、今後も全職員で情報を共有しながら、個に応じた支援・指導を行っていかねばならない。

#### (6) 保護者・地域との連携と小中一貫校への取り組みについて

教職員自己評価の「①適切な情報発信等を通して、保護者・地域との共通理解を図るとともに、その力を活用し、ともに支えあう地域の学校づくりに努めることができたか。」(100%)、また保護者アンケート「⑦学校は、情報発信(連絡帳、おたより、ホームページ等)として、子どもの教育活動を伝えている。」(96%)の結果より、学校と保護者との情報共有や連携はある程度とれていると考えられる。今後も継続して、適切な情報を発信することで、保護者や地域との連携を深めていきたい。

P T A活動に関する評価では、教職員自己評価の「P T A活動等を通して、保護者との協力関係を築くように努めることができたか。」(100%)の項目の評価が高い。その一方で保護者のアンケートでは「14 P T A活動に進んで参加している。」「15 お子さんを地域の行事に参加させている。」の2項目は否定的評価21%と28%と低い結果となった。新型コロナウイルス感染症の影響により、保護者や地域住民、学校関係者の支援を受けづらく、充実した教育活動の機会が失われてしまっていることが大きな原因であると考えられる。コロナ禍を過ぎ、制限が解除されて日が浅いが、保護者・地域社会と連携・協働しながら、社会に開かれた教育課程の充実を図っていきたい。

本校は昨年度より「小中一貫校南アルプス市立白根飯野小学校」としてのスタートを切った。保護者アンケート「16 小中一貫校として、3校(白根巨摩中、白根飯野小、白根東小)が連携して取り組み教科指導を行っていることを理解している。」(83%)と肯定的評価であるが、「小中一貫校としての取り組みをしていることを理解しているが取り組みをしている実感がない。変わった感じがしない。」という意見があった。小中一貫校の充実を図る上でも、地域の連携を中核とした教育活動を行うことが大切であり、取り組み内容を地域住民や保護者に説明し、理解と協力を求める活動も大事になってくる。

※前期では教職員自己評価の項目の中に小中一貫校の取り組みについて項目を設定しなかつ

たので次回（後期に）設定する。

### [3]学校関係者評価委員の助言等

- 子どもたちが、地域の行事（お祭り等）に参加できるようになり、地域でも子どもの良いところを知る機会になっている（事例：お祭りの後にごみを率先して拾う中学生がいた。）。地域の行事が再開されることで、コロナ禍による親同時のコミュニケーションの欠如が解消され、親同士の関りやつながりが増えることを期待している。子どもに関心を持つ地域性は飯野のよさなので、学校と地域の連携をさらに進めたい。
  
- 地域の行事に子どもたちが多く参加してくれてうれしい。子どもたちが盛り上げてくれることが、地域の原動力となる。子どもから進んで挨拶できるようにするためには、学校として、大人も含め先頭を切ってやっていくことが大切である。
  
- アンケートの質問項目が多いと苦しくなる。すべての項目で肯定率100%を求めるのは難しい。だからこそ、大事に思うところや中心になることは授業や行事を問題として改善点を考えていけるとよい。
  
- 自己肯定感の低さは、自身がない、恥ずかしがる子、できない子が主人公になるように仕向けていくのはどうか。先生がポイントを絞ってメリハリをつけて余裕をもっていることが大切である。褒めることでしか子どもは育てられないので、子どもとたちへ「すごい」ところを褒めて行ってほしい。授業や行事にゆとりをもって、見極めていく。先生方がポイントや大事なところを絞っていくことを是非行って行ってほしい。
  
- 言葉の問題は、言語環境によって言葉遣いが違ってくる。言葉は慌てると強くなるので、やはり余裕をもって話していくことが大切。
  
- 教職員が足りていないという中で、先生方はよくやっていると思う。友達関係のところで、スマートフォンを持っている子どもが多いことが気になる。スマートフォンの犯罪が多いと聞くので今後、子どもたちが取り巻く環境が心配だ。